注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
日常

【作者名】
ユーミン好き

【あらすじ】
永遠に終わらない『日常』の世界がここに！

ビスケット君3号

「できたぁ～！」
『東雲研究所』と書かれた家から声がした。
「な～の～！さ～か～も～と～！来て～」
「はかせ、どうしたんですか？」
「ガキ、昼寝の途中で呼ぶな！」

東雲なのと猫の坂本がはかせの部屋へやってきた。

「ジャ～ン♪『ビスケット君3号』です」
「ビスケット君3号です！」
はかせは、嬉しそうに紹介した。
「ああ、またですか」

なのは、興味無さそうに言った。

(『また』ってね…。まあ、僕はビスケット君2号をはかせが改造してできたからなぁ…)

「ビスケット君3号は、1号と2号とは違うの～！」

はかせは、猛アピールした。

「ビスケット君3号の特技は、野菜の早切りです！どうぞ！」
「了解です！台所をお借りします」

ビスケット君3号は、台所へ向かった。
はかせ、なの、坂本は、あとを追った。

タタタタタ…
「できました！」
こんもりとキャベツのみじん切りができていた。

「…」
なのは、黙り込んだ。

「反応、薄っ！てか、前と同じ展開・・・」

「なの、なんで、なんで、驚いてくれないの！」

「だって、早切りぐらいなら私にもできますから」

「でも、いつもゆっくりだよ!?できるなら、なんでのそのそやってんの!?」

「だって、そうした方が人間らしいじゃないですか～。あれ、前も同じこと言いませんでしたっけ？」

「確かに娘は言ってたぞ～」

はかせは、少し泣きそうになりながら言った。

「じゃあ、なのはこれができるの!?」

ビスケット君3号は、氷柱とスイカを取り出して、それらを素早く削った。

数分後・・・

「わぁー！すっすごいですね！ねぇ、坂本さん」

坂本の耳がピクッと動いた。

「そ、そうだな」

二人が見たのは、氷でできたサメの像とスイカでできた睡蓮の花だった。

「ねぇ、すごい？」

「はい、すごいです！パーティーの時にお願いしたいくらいです♪」

「えへへ～（^ー^）」

ビスケット君3号は、坂本に目をやった。

「疲れてるようですね。坂本さん、マッサージしてあげます」

ゆっくりと近づいていった。

「くっくるな！何されるかわからないからな！」

「えへへ～、大丈夫だよ」

そうしている間に坂本は、ビスケット君3号に掴まれた。

「じっとしててくださいね」

手を伸ばしていった。

「ぎゃーっ」

坂本は、思わず目をつむったが…

「気持ちい～い」

坂本は、ニタ～っとした。

「ね～、言ったでしょ～」

はかせとなのは、どさくさに紛れて、肉球を触っていた。

「おい、ガキっ！娘っ！どさくさに紛れるな！」

東雲家は、今日も平和であった。

カラスがかぞくになった

ある晴れた日、駅前のスーパーで買い物して帰ると…
家前にカラスがいた。

「あ、カラスだ」

「はかせ～、危ないですよ～。ほら、裏口から入りましょう……って、聞いてないし！」
はかせは、カラスに近づいた。

「な～の～、このカラス、あの時のカラスだよ～」

「あ、本当ですね。なら、大丈夫ですね。じゃあ、家に入りましょう」
そういって、カラスを掴み、家へ入った。

「また、しゃべらせてみようか～」

「今度は、坂本さんのスカーフを使っちゃダメですよ。坂本さんを困らせたのは、はかせなんですから」

「は～い！ちゃんとつくってきま～す」
はかせは、勢いよく走っていった。

「フグッ！なんだよ、ガキ！痛いじゃないかよ！人を踏むなよ！下見て歩けよ！」
はかせは、坂本に気づかず、走っていった。

「ガキ、聞け～！」

「あ、坂本さん。大丈夫ですか。また、あのガラスが来ましたよ」

坂本は、なのとリビングに入った。

はかせが部屋に行ってから、１０分後…

「できたぁ～！」

はかせは、右手に青いスカーフを持って戻ってきた。

「じゃあ、さっそくつけてみよう!!」

はかせは、カラスにスカーフをつけた。

「しゃべるかな？」

「喋るでしょ。はかせが違うものを作ってないなら…」

しばらくして、カラスが一言。

「どうもお久しぶりです。カラスです」

「わー、しゃべった！」

「なのさん、はかせさん、坂本さん、今日は、お願いがあってきました」

カラスは、お辞儀をした。

「なんですか？お願いって」

なのがカラスに聞いた。

「実は、私、仲間のカラスに仲間はずれにされて…。寂しいので、一緒にここに住みたいんです」

「え…」
「え…」
「え…」
「「えーっ！」」

「ダメですか？」
「ダメだろ！なあ、娘…」
「いいよ～、ね～、なの♪」
「ええ、大丈夫ですよ」
「俺の話を聞けー！」
「ありがとうございます。何かお役にたてるといいのですが…」
「勝手に決めるな！」
「いいじゃないですか、坂本さん」
「さかもと、あたらしいかぞくがふえたね～。えへへ…」
「ったく、しっかたねーな…。カラス、今日からここに住んでもいいぞ」
「な～の～、カラスのなまえ、なにがいい？」
「そうですね～、カイトとかどうですか？」
「カイト、いいですねぇ～」
「じゃあ、きょうからカイトだよ～」
「ヨロシクな、カイト」
「こちらこそ、坂本さん」

カイトは、坂本の手にくちばしをつけた。

「いてっ！いててててて…」

「「「「アハハハハ…」」」」

東雲家は、今日も平和であった。

第九カフェ×ゆっこ　パートⅡ

この前、第九カフェに行ったとき、大失敗した。
だから、もう行くのをやめようかと思ってたけど、勉強し直して行ってみることにした。

「ご注文は…」

「えーと…、じゃあ、ココアの、ショートで」

「ココアのスモールでよろしいでしょうか？」

（ええええー！こ、この間は『ショート』だったのにー！なんでー！）
足元がふらふらしてきた。

「それで…いいです」

「…ホットにしますか？アイスにしますか？」

「ホットで！」

「ホットになりますと、ハァ…ハァ…、ソロとスウィートがありますけれど…」

（『ドッピオ』なくなってるー！てか、『スウィート』ってなに？『酢eat（スウィート）』？お酢を食べるの～？それじゃ、ココアじゃないよ～）

ぐるぐる目が回っていた。
すると、『本日のおすすめ』の文字が目に入った。

活路を見いだしたようだった。

「あ…、ほ…本日のおすすめにしようと思ってたんだ…アハハ…ごめん、ごめん…忘れてた…」

すると、デジャブを感じた。

「あのー、スゥーハァー、スゥーハァー、『本日のおすすめ』は、ホットココアになっておりますが…」

（ぎゃーっ、デジャブ！）

「それでいいです！」

「ですから、ホットココアになりますと、…ソロとスウィートがございますが…」

…ソロとスウィートが…
…ソロとスウィートが…
…ソロとスウィートが…
…ソロとスウィートがございますが…

（もうどうしたらいいのー！）

もうヘトヘトだった。

「そ…そこらへん、取り繕ってください…」

「は、はい！」

（また、同じ失敗しちゃったよ…。トホホ…）

窓際の席に座り、ぼんやり外を眺めていた。

「お待たせいたしました～、ホットココア・スモールです～」

店員がカップを置いて、札を取っていった。

その店員は、あの時の男性と同じだった。

（デジャブ続きだなぁ…）

デジャブとは違ったのは、カップの大きさが極小ではなかったことだった。

飲んでみた。

「甘っ！甘すぎる！」

あの時のコーヒー以上にショックが大きかった。

（涙が出るよぅ…）

なんとか激甘ココアを飲み干して、店を出た。

（みおちゃんに言ったら、笑われるかな…）

外に出ると、雨が降ってきた。

（第九カフェが…トラウマだよ…）

傘をささず、歩き始めた。

（これからは…ココアも…自動販売機でいいや…）

☆後日談☆

次の日、ゆっこは風邪で学校休みました。
ゆっこは、バカだなぁ…
ｂｙ　みお

ゆっこは、天才だよ。
…バカは、風邪引かないって言うでしょ…？
ｂｙ　まい

相生(あいおい)さん、甘いものを取りすぎると、体に悪いですよ。
ｂｙ　なの

はかせもココアのみたい！
ｂｙ　はかせ

ばっかなやつだなぁ…。
ｂｙ　坂本